

自殺論

～ 自殺と向き合えるようになるまでの過程に対する考察～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
中川 淳

毎年 6 月、警察庁が前年に自殺で亡くなった人の数を発表している。日本では、1998(平成 10)年にその数が 3 万人を超え、それ以後 2005(平成 16)年まで、この数字を下回ることなく推移している。また自殺率では、主要国のなかでロシアに次ぐ数値を示しており、日本は世界的な自殺大国となっている。

第一章では、厚生労働省、警察庁などが発表している自殺者数の推移、年代別自殺死亡者数などを挙げ、エミール・デュルケムの『自殺論』を読み解きながら、日本における自殺に関する社会的要因について分析し、今後の日本社会において心配される要因について論述する。

身近な人間が自殺すると、その事実を世間に知られたくないという心理が働く。それが家族の場合には、特にその心理が強く働く。

第二章では、自死遺児編集委員会・あしなが育英会 [編]『自殺って言えなかった。』を引用して、自殺者の遺族の声を伝えながら、日本においてなぜ自殺という事実が隠蔽されるのか、その心理的な要因について日本特有の問題点を歴史的な視点にたって論述する。

自分の親や子ども、兄弟姉妹が自殺したあと、遺族はどうやってその事実を受入れられるようになるのか。年間の自殺者が 3 万人を超えていることが問題視されるなかで、その 3 万人の背後にいる残された家族の状況が伝わってくることは少ない。

第三章では、エリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』を読み解きながら、残された遺族がたどる心理的な経過について論述する。

本論文は、日本の自殺の実態、自殺を隠しながら生活していかなければならない遺族の状況、そして残された遺族がたどる心理的な経過を伝えることで、自ら死を選択する人が少なくなることを願って論述するものであり、私自身が自殺者の遺族でもあることから著述した次第である。